

看護者が期待する CNS の役割と今後の課題

○川上理子、嶋岡暢希、宮田留理、山田覚、
森下安子、東郷淳子、比村容林、福田亜紀、
野嶋佐由美(高知女子大学)

目的

高知女子大学看護学研究科では平成12年度から6領域でカリキュラム認定を受け、専門看護師(以下 CNS とする)の育成を行っている。現在 CNS は全国に26名であるが、看護系大学院9校37教育課程で CNS 育成が行われており、CNS を受給する体制は整いつつある。本研究では、臨床の看護者が期待する CNS の役割を明らかにし、今後の課題を検討するために調査を行った。

方法

対象者は A 県在住の看護職 582 名とした。方法は研究者らが作成した質問紙を用いたアンケート調査で郵送により質問紙を配布した。質問項目は、対象者属性9項目、CNS への関心や期待を含むもの7項目であり、プレテストを行い修正した。質問紙は無記名で、参加は自由であること、調査以外の目的には結果を使用しないことを明記した。調査期間は平成12年3月20日～4月30日であった。

結果

1. 対象者の特徴:対象者 582 名中 311 名の回答を得た(回収率 53.4%)。回答者の平均年齢は 41.1 歳(SD=9.33)、平均経験年数は 18.9 年(SD=9.24)であった。また、職種は看護師、保健師、准看護師の順で多く、職位では管理職 113 名(36.3%)、スタッフ 186 名(59.8%)、その他 9 名(2.9%)で、回答者はキャリアを積んだスタッフ看護師が最も多かった。
2. CNS の認知度:CNS という言葉を聞いたことのあるものは 286 人(92.0%)にのぼったが、CNS が果たす機能について「知っている」と答えたのは 101 人(32.5%)であり、「少し知っている」129 人(41.5%)、「知らない」54 人(17.4%)と、臨床での機能については認知や理解が十分普及しているとは言えないことが伺えた。
3. CNS への関心と導入への希望:CNS について①「興味をもっている」では、非常にそうである 65 人(23.8%)、かなりそうである 65 人(23.8%)、そうである 117 人(42.9%)、そうでない 26 人(9.5%)であった。②「臨床での活躍を期待している」では、非常にそうである 127 人(45.7%)、かなりそうである 71 人(25.5%)、そうである 70 人(25.2%)、そうでない 10 人(3.6%)であった。③「自分の職場にもいてほしい」では、非常にそうである 117 人(42.5%)、かなりそうである 68 人(24.7%)、そうである 69 人(25.1%)、そうでない 21 人(7.6%)であった。3項目共に「そうでない」と答えた者は1割以下であり、関心や期待を寄せていると答えた看護者が9割を超えていた。

自由記載の項目では、CNS の必要性や導入への希望として、①医療の高度化に伴う看護の専門性の必要性、②患者・家族の要求の複雑化・高度化に伴う専門的ケアの提供および看護の質向上の必要性、③看護者の悩みに対し、看護者が安心して質の高いケアを提供できる状況を整える必要性、④看護職者が組織全体の中で意志決定し発言していける力を身につける必要性から、多くの肯定的な意見が述べられていた。一方で、①受け入れ側の体制、②CNS のポジション、③CNS の活用法についての課題があり、現状での導入は困難ではないかという意見も見られた。

4. CNS の役割への期待 : CNS の担う役割について自由記載してもらったデータを CNS の機能別に分類した。その結果、①実践については、患者・家族の安心につながる質の高いケアの提供、患者への看護の質向上、専門的知識・理論に基づいた看護の提供など、CNS が実践において質の高いモデルを示し、実践者のリーダーとして活躍することへの期待を抱いていた。②教育については、専門的知識・技術の導入および看護者への教育、技術の統一と専門化を図るなど、教育において指導的役割をとり、スタッフの力量形成や看護の質のレベルアップに貢献することへの期待を抱いていた。③相談については、患者ケアに関する悩みや、看護者としての悩みの解決策を探るために、CNS に相談することを望み、その役割を果たして欲しいと期待していた。④調整については、「医療チームに患者家族とのコーディネーターがいるということで看護婦は安心し、より良いケアが提供できる」という意見1例のみで、調整そのものだけでなく看護者の精神的な部分のサポートとしての期待を述べていた。⑤研究については、臨床での看護研究を具体的に指導する役割への期待が述べられていた。これらの役割への期待のみならず、CNS の活躍が周囲のスタッフの刺激となり、スタッフを活性化しキャリア開発への意欲を引き出していくことにつながることに期待もあった。

考察

本研究で CNS に対する関心と期待を尋ねた3項目とも、関心や期待を寄せていると答えた看護者が9割を超えていたことは、本研究の対象者が看護の質を向上していくために、CNS が重要な存在として期待し、また、臨床での問題を解決するために手助けをしてくれる存在として CNS の活躍を強く望んでいることを伺い知ることができる。

CNS の役割に対し看護者は、実践・教育・相談・調整・研究という各々の役割についての期待を抱いていた。しかし、本研究では、調整に関しての期待を述べた者は1例のみであった。CNS 導入システム検討委員会の調査(1996)によると、看護師が CNS から得たい助力の中で最も多かったのは治療チーム内や看護師間、他職種間との「調整」であった。CNS を雇用している5施設の看護師を対象に行った調査(1996)でも、実際に CNS を活用したのは「患者－看護者間の関係調整」20.4%、「看護婦－医師間の関係調整」7.0%、「医療チーム内の調整」6.8%と調整役割での活用が明らかにされている。CNS にとって「調整」は重要な役割として位置づけることができる。本研究で調整役割に関しての記載が少なかったのは、調整が元来婦長の役割として位置づけられ期待されていることが一つの理由として考えられる。しかし、入院期間短縮で早期に在宅移行する患者の増加、チーム医療の推進により調整内容が複雑化している現状を考える時、婦長業務の多忙さや組織の管理職というポジションゆえに婦長が調整役割を遂行するには多くの困難を伴う。各々の業務を見直し、最善のケアを患者・家族に提供できるよう役割分担を再考する必要がある。CNS として、自らの持つ調整にかかわる能力をアピールし、一つの重要な役割として果たしていくことが望まれる。

本研究では倫理に関しての役割期待を述べた者は見あたらなかった。患者・家族の権利、職業人としての姿勢が問われる中、看護者の倫理的感受性を高め、医療現場に潜む倫理的問題に取り組むことも CNS の一つの重要な役割である。CNS が、このような役割を担う存在であることをアピールするとともに、その実績を示していくことが急務である。若狭ら(2001)は精神 CNS の活動の効果に関する研究において、CNS が職場や現場からの求めに応じて役割を発揮していく中で管理者との協力関係を維持し、新たな役割開発につなげていることを明らかにしている。役割を発揮し活動の成果を組織全体に示していくことは CNS の定着にも重要であると考えられる。